

第16回（平成元年度）日産学術研究助成募集要項

重点テーマ——人間と機器との係わりに関する研究——

助成の対象

助成の対象とする課題は、次に例示あるいは類似する分野について、基礎研究および応用研究に助成します。昨年度より「人間と機器との係わりに関する研究」を重点テーマとして設定しておりますが、本年は人文科学の領域を含めた先駆的・独創的、学際的な研究を期待しております。

応募要領

1. 申請方法

各学・協会経由（推薦）を必要としますので、財団所定の申請書を指定の各学・協会宛に提出願います。なお資料の請求は次頁を参照下さい。

2. 推薦の枠

一般研究（A）、（B）については、併せて3件以内での推薦を各学・協会にお願いしております。

奨励研究については、各学・協会とも申請のあった全件の推薦をお願いしております。

3. 締切日

学・協会から当財団への推薦締切は平成元年8月31日（木）です。各学・協会の受付締切は、これより1カ月前程早いところが多いようです。詳しくは各学・協会へ直接問い合わせください。

気象学会への提出締切は、7月31日（木）です。

助成金の費目

助成金は設備・備品費、消耗品費、旅費、謝金、その他に分かれております。

設備・備品費：研究に必要な機器（装置）器具、備品等の費用。なお、汎用的な機器類（例えばパソコン）などはご遠慮下さい。

消耗品費：試験・実験に用いる各種材料、部品、薬器類などの費用。

旅費：研究のために必要な出張費（交通費、宿泊費、雑費）。

謝金：研究のために臨時に雇った人の費用（試験、実験、観測、採取、記録、整

研究助成要約

研究の種別	一般研究助成		奨励研究助成
	(A)	(B)	
研究の性格	研究が長期にわたる学際的グループ研究 (共同研究に限る)	独創的な短期間の研究または本格的な研究への調査・準備的研究 (共同研究に限る)	若手研究者による萌芽的・独創的研究 (個人研究)
1件当りの助成金額	1,500万円限度	150万～300万円	50万～200万円
助成金の総額（採択件数）	約12,000万円 (10件程度)	約2,500万円 (10件程度)	約2,500万円 (20件程度)
助成金の支払期間	・平成2年度(2/4～3/3)を助成第1年度とする。 ・助成期間2～3年*	平成2年度に交付 助成期間1年*	同左 助成期間1年
助成金の使途	設備・備品費は助成総額の60%程度とする		

* は研究の種別の説明を参照のこと。

理などを手伝ってもらった人への謝金)あるいは研究に関する業務の一部を委託した場合の費用。

その他：上記以外に必要な費用。主なものとしては、会議費、調査資料代、諸雑費など。

次の費用は助成金の対象となりません。

- ・研究室の運営管理に必要な費用。
- ・研究の成果の発表を目的として行う報告書の刊行、シンポジウム等の開催費用。

選考

当財団の選考委員会(委員長向坊隆, 他7名)におい

て厳正に選考の上, 平成2年2月開催予定の理事会で正式に決定します。またその結果は, 各学・協会を通して速やかに連絡いたします。

審査は, 原則として4つの評価項目をベースに評価し, さらに評価の高いものについて選考の上, 採択を内定します。

応募書類は返却いたしませんので, 予めご承知おきください。

資料請求・問い合わせ先

財団法人日産科学振興財団研究助成係

〒104 東京都中央区銀座 6-17-2 木挽館

TEL (03) 543-5597

FAX (03) 543-5598 (TEL 兼用)

秋季大会におけるスペシャルセッションのご案内

スペシャル・セッション

「いろいろな視点からみた梅雨」

～大規模スケールから微物理まで～

趣旨：梅雨の研究は、簡単にいえば、梅雨前線およびその周囲の気象中の水の動態とそれを担う気象擾乱を明らかにすることと思います。しかしながら、それらは実に多様な時間・空間スケールを持つため(例えば、雲の微物理過程では数 μ から数cmまでの水滴の成長が重要ですが、気象擾乱になると、積雲・メソ・シノプティック・グローバルスケールというように数kmから数千kmの空間スケールにわたります。)、各研究者はそれぞれのスケールの現象をさまざまな手法(観測・解析・モデル・理論)で研究してきました。こうしてそれぞれのスケールの現象の現解は深まりましたが、それらのスケール・手法の結果についての横断的な理解にはまだギャップがあるように思われます。今回は、従来の分け方である気候・総観規模・中小規模現象・積雲対流・雲物理

といったスケール間の枠を取り外して、いろいろな立場の研究者を一堂に集めて「いろいろな視点からみた梅雨」のスペシャル・セッションを開きたいと思います。

このセッションでは、講演者にまずそれぞれの立場から研究成果を報告していただき、次に他のスケール・手法に対するコメント(例えば、何が分かりにくいのか、どんな出力が必要か、ギャップの埋め方など)を付け加えていただきます。こうしてお互いのギャップを埋めて、梅雨に関して参加者の総合的理解が深まるようにしたいと思います。また、この場が研究者間の交流を深める契機になり将来の観測・解析・モデリングに役立てばと期待しています。

呼掛け人：

吉崎 正憲：東京大学海洋研究所

石原 正仁：気象研究所

加藤内蔵進：名古屋大学水圏科学研究所